

平成 18 年度 課題研究成果報告書

平成 26 年 4 月 17 日現在

研究種目： I

研究期間：平成 18 年 ～ 平成 20 年（2 年間）

研究課題名：認知症に対する作業療法のエビデンス検証に関する研究

研究代表者

氏名：鈴木久義

所属：昭和大学保健医療学部

会員番号：02093

研究成果の概要：

直近 10 年の認知症に関する作業療法研究について、認知症に対して効果があると結論づけるための条件は 1)サンプル数、2)プログラムの形態、3)プログラム内容、4)採用した研究デザイン、5)効果指標、である可能性が判明した。

認知症グループホームをランダムに介入施設とコントロール施設に割り付け、週 1 回の介入を計 22 回実施した。介入施設に対しては、認知リハビリテーション的要素があるプログラムパッケージによる介入を行い、コントロール施設には、通常プログラムを実施した。その結果、認知リハビリテーション的要素があるプログラムパッケージは認知症者に対して有効であり、特に認知症者の前頭葉機能を改善させ得ることが判明した。

直近 10 年の認知症に関する国内で発表された質的研究について、得られた研究の概要を要約した結果、作業療法は「作業の主体としての認知症者のあり方」を明らかにしていた。

助成金額（円）：500,000

キーワード：認知症，エビデンス，比較臨床試験

1. 研究の背景

従来、認知症に対する治療・援助は、アルツハイマー型認知症に対する塩酸ドネペジルの投薬や心理社会的療法としてのリアリティオリエンテーションあるいは回想法、そして作業療法等が中心となって現在に至っている。しかし、コクランシステマティックレビューを参照する限り、認知症に対する心理社会的療法としてのリアリティオリエンテーションあるいは回想法、音楽療法やアロマセラピーといった補完代替療法、そして作業療法の臨床疫学的エビデンスは極めて低いレベルであると断ぜざるを得ない。一方、日本作業療法学会を始めとした、各種報告に明らかのように、認知症患者に関与する臨床作業療法士の「作業療法効力感」は明確に存在すると考えられる。この「事実と認識の差」は、主として採用する研究デザインに起因するものと思われる。つまり、作業療法には相

当レベルの臨床疫学的エビデンスが存在するにもかかわらず、種々の要因によって採用される研究デザインが限定されるために、明確なエビデンスを提示できないという問題が存在すると推測することができる。

2. 研究の目的

本研究では、1)患者・家族に対する最大限の倫理的配慮をしつつ、可能な限り臨床疫学的エビデンスのレベルが高い研究デザインを採用することによって作業療法における臨床疫学的エビデンスを明確にすること、2)さらに、昨今注目を浴びている、いわゆる質的研究にも着目し、質的研究から得られる各種の所見を「作業療法の質的エビデンス」として定式化すること、を目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、主として 3 つのサブ研究から構

成され、総合的所見をもって「認知症に対する作業療法のエビデンス」を検討する。①認知症に対する作業療法に関するシステマティックレビュー・メタアナリシスの作成：認知症に対する作業療法に関する国内外の研究(効果・介入研究)を抽出し、システマティックレビューの作成を行う。②比較臨床試験を用いた軽度認知症者に有効なプログラムパッケージの開発及びその効果の検討：軽度認知症者の身体機能及び精神機能の維持・改善を図ることが可能となるプログラムパッケージを開発し、その効果を検証する。研究デザインは「比較臨床試験」を採用し、各群の介入前後の評価指標を検討する。③認知症に対する作業療法に関するメタエスノグラフィの作成：作業療法によって得られる質的な効果・成果を「質的エビデンス」とし、認知症に関する質的研究を統合する手法すなわち、メタエスノグラフィを用いて、作業療法的介入の質的エビデンスを検討する。

4. 研究成果

①システマティックレビュー：直近 10 年の認知症に関する作業療法研究について検討した結果、特定の測定指標に関して数量的な分析を適用している先行研究例が少ないことが判明したため、従来のメタアナリシスではなく、ブール代数分析によるメタアナリシスによって、認知症に対して効果があると結論づけるための条件(必要条件, 十分条件, 必要十分条件)を検討することとした。その結果、1) サンプル数, 2) プログラムの形態, 3) プログラム内容, 4) 採用した研究デザイン, 5) 効果指標, がそれらの条件となり得ることが判明した。

②プログラムパッケージ作成及び比較臨床試験：認知症グループホームをランダムに介入施設とコントロール施設に割り付け、週 1 回・約 1 時間 30 分の介入を計 22 回実施した。介入施設に対しては、1) リアリティオリエンテーション, 2) 賦活体操, 2) 運動系・思考系の集団レクリエーション, 3) 個別・集団の創作活動, 5) クールダウン, を実施する一方、コントロール施設には、1) リアリティオリエンテーション, 2) 賦活体操, 3) DVD 鑑賞, 4) クールダウンを実施した。その結果、1) 脱落や参加不同意, 評価不能等の理由で最終的な対象者は介入群 13 名, コントロール群 7 名となった, 2) 介入群において、介入後に FAB 得点が高くなる傾向が認められた, 3) 両群間及びコントロール群の介入前後で評価指標に有意差は認められなかった。

③メタエスノグラフィ：国内で発表された質的研究について、1) 直近 10 年の研究を主として医学中央雑誌を用いて抽出し、2) 得られた研究の概要を要約し、3) 統合の実施を行う方針を決めた。その結果、1) ターゲットとす

る研究は多く見積もっても 7-10 件である、2) 各研究は概ね「認知症者の作業=行為・行動」に注目していた。

5. 文献

- 1) 山崎結城, 磯野百合子, 福田健一郎, 林田博典, 小川奈津代, 他：作業療法士による介護予防事業の効果—長与町認知症予防教室の取り組み：作業療法ジャーナル 43：602-606, 2009.
- 2) 中村佳奈：老人会活動に組み込んだ健康体操教室の試み—認知症予防に配慮した体操—。作業療法 27：283-288, 2008.
- 3) 近藤敏, 西上忠臣, 北川美智子：認知症予防における作業療法の効果。作業療法ジャーナル 41：369-373, 2007.
- 4) 小野剛：簡単な前頭葉機能テスト。脳の科学 23:487-493, 2001.
- 5) 加藤伸司：改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)。大塚俊男, 本間昭(監)：高齢者のための知的機能検査の手引き, ワールドプランニング, 1991.
- 6) 田尻寿子, 辻哲也：機能的自立度評価表(FIM)。作業療法ジャーナル 38:568-577, 2004.
- 12) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博, 須山靖男：生活満足度尺度の構造—因子構造の不変性。老年社会科学 12, 102-116, 1990.
- 7) 坂爪一幸：認知症の認知リハビリテーション。MB Med Reha No. 54, 85-95, 2005.
- 8) 灘村妙子, 村木敏明, 相原育衣：回復期リハビリテーション病棟における集団作業療法介入の心理社会機能に関する検討。日本作業療法学会抄録集 2009.

6. 論文掲載情報

7. 研究組織

(1) 研究代表者

氏名：鈴木久義
所属：昭和大学保健医療学部
会員番号：02093

(2) 共同研究者

氏名：齋藤慶一郎
所属：昭和大学保健医療学部(当時)
会員番号：03434

氏名：作田浩行
所属：昭和大学保健医療学部
会員番号：05577

氏名：武捨英理子(増山英理子)
所属：昭和大学保健医療学部
会員番号：14666

氏名：三森夏穂
所属：汐田ヘルスクリニック(当時)
会員番号：16527

氏名：大澤彩
所属：東京医科歯科大学医学部附属病院(当時)
会員番号：23678

氏名：酒井由香里
所属：横浜新都市脳神経外科病院
会員番号：13168